

## 第32回泌尿器科漢方研究会学術集会

代表幹事:堀江重郎(順天堂大学大学院医学研究科泌尿器外科学)

日時:2015年6月20日(土) 13:00~18:05

会場:コクヨホール(東京都)

### 難治性の下部尿路症状に対し 漢方薬が奏功した一例

順天堂大学大学院医学研究科 泌尿器外科学

○青木 裕章、長屋 直哉、青木 悠介、芦澤 健  
高畑 創平、知名 俊幸、新井 貴博、塩澤 真司  
寺井 一隆、清水 史孝、久末 伸一、和久本 芳彰  
堀江 重郎

症例は74歳男性。

平成18年に下部尿路症状を訴え当科初診。既往症に特記事項なし。初診時、国際前立腺症状スコア13点、前立腺体積39cc、尿意切迫感を認めていた。

前立腺肥大症および過活動膀胱の診断でタムスロシン塩酸塩、オキシブチニン、エビプロスタットが処方された。しかし、症状の改善なく経過。オキシブチニンは残尿量増加のため平成22年に中止された。その間にPSA高値のため2回前立腺針生検が施行されたが、いずれも悪性所見は認められなかった。その後平成22年よりデュタステリドを追加投与され、夜間頻尿は1回減少しIPSSは12点となったため、以後経過観察されていた。

平成26年11月冷えと頻尿の増悪を訴え受診。これに対し牛車腎気丸を処方したが改善は軽度で、胃部の不快感を訴えた。このため漢方学的診察を行った。

身長162cm、体重66kg、脈は沈、腹診では胸脇苦満はないものの、下腹部に圧痛を認めた。また手足の冷えを訴えるも顔面はほてりを訴えていた。長期にわたり排尿障害治療を受けていた影響もあるため心気症的な傾向を認めた。

これらの所見を加味し加味逍遙散を投与したところ冷えの改善を自覚し、それに伴い排尿障害の改善も認めた。その後も内服を継続している。

加味逍遙散は逍遙散に柴胡と山梔子を加えた方剤である。「和剤局方」には血虚勞倦、五心煩熱、頭目昏重、發熱盜汗、寒熱瘧のごとくに加え水調わずと明記されている。

このように通常、更年期障害や月経異常などの婦人に処方されることが多い方剤である。

しかし、男性においても心気症的傾向の不定愁訴や柴胡剤や駆瘀血剤の証を併せ持つ虚証に広く用いられるとされる。本症例は冷えとほてりの更年期障害様の症状を呈していたこと、下腹部に圧痛があり駆瘀血が考えられたことから加味逍遙散を選択した。本症例では桂枝茯苓丸や当帰四逆加呉茱萸生姜湯が鑑別処方になると考えられる。これまで男性の排尿障害に対する加味逍遙散の報告は比較的稀であり、今回若干の文献的考察を加え報告する。